

《編集後記》

『日蓮学』第六号をお届けいたします。本号は講演録一編、資料二編、論文二編の玉稿を賜りました。

中尾堯先生には、第七十三回日蓮宗教学研究発表大会（令和三年十一月十三日、本学開催）における日蓮聖人御降誕八〇〇年記念講演の講演録「日蓮聖人御生誕をめぐる古文書」をお寄せ頂きました。日蓮聖人の御生誕をめぐり、(1)誕生の史実をめぐる史的環境(2)「御降誕」の宗教的意義(3)祖師伝と祖師信仰の生成という三つの観点から、新出の古文書・文献の紹介を踏まえて考究された論となります。

故・浅井圓道先生と都守基一先生による「行学院日朝撰『補施集 序品ノ四』翻刻」は、身延山久遠寺第十一世日朝上人（一四二二～一五〇〇）が文明十一年（一四七九）から明応六年（一四九六）にかけて撰述した『法華経』注釈書である『補施集』（全一七九巻）の翻刻資料で、『日蓮学』の前身である『東洋文化研究所報』からの継続となります。

金炳坤先生の『法華論』諸本校合（三ノ四）は、本論の層位関係——摩提訳の古層（BD11838.S2504）、旧層（高麗再雕大藏経）、新層（嘉興藏）、流支訳の古層（興聖寺写本）、旧層（妙法蓮華経論子注）、新層（寛永二年版）、留支訳の古層（興聖寺刊本）、旧層（高麗再雕大藏経）、新層（嘉興藏）——を究明し、摩提訳が留支訳へと変貌していく過程を考証した資料になります。

西康友先生の「梵文法華経写本における文献学的実証研究の推進——仏典の原典を解読する意義——」は、今年度の本研究所研究例会における発表を基とし、梵文『法華経』写本の実証的な言語学的研究について、その研究状況と意義を提示された論考です。『ケルン・南條本』における編集上の問題解決の導出や、梵文『法華経』写本の伝承過程の痕跡等を、情報工学者と共同した学際的な研究手法によって明らかにされています。

横殿伴子先生の「『マニ・カンブン』における「ナーローの六法」——観自在菩薩の実践指南（dmar khrid）——」は、古代チベッ

ト王ソントンエンガンポの遺言書とされる『マニ・カンブン』に説示されているカギユ宗の実践「ナーローの六法」の考察を通じ、後伝期チベット仏教における密教の系譜を跡付け、チベットにおける如来藏思想史を『宝性論』の瞑想学派の視点から読み解くことを試みた論考となります。

末筆ですが、国際的なレベルでの日蓮研究の今後いつそうの発展、そしてその発展の一翼を本研究所が担えることを心より願いまして、第六号の編集後記といたします。

(岡田文弘記)